



イングリッシュ・ナショナル・バレエ公演で『エチュード』(ランダー振付)を踊る猿橋賢 Photo: E. Kauldhar/ Dance Europe

恍惚と死 イングリッシュ・ナショナル・バレエの秀逸なミックス・プログラムについて、ディアマド・オミーラがレポートします。

ENBはこのたび、新芸術監督のタマラ・ロホが全面的に監修した最初のプログラムを上演した。同団の古くからのレパートリーである『エチュード』、カンパニー初演の『小さな死』、そしてロボ自身の存在感を見せつけた『若者と死』というラインナップは、新しい時代の到来を高らかに告げるものとなった。ニコラ・ル・リッシュとイヴアン・プトロフが『若者と死』、デンマーク・ロイヤル・バレエのアルバン・レンドルフが公演期間中にワディム・ムタギロフの代役に立つなど、男性はゲスト頼みな面もあったものの、このように、埋め草的な演目が皆無なプログラムは希少である。

『小さな死』が、近年新しい作品の少なかったのレパートリーに加わったことは喜ばしい。イリ・キリアンの振付は、一連の洗練されたデュエットに顕著なように、ダンサーの潜在的な力をみごとに引き出していた。視覚的にも、男性が絹の布をたなびかせてユニゾンで踊る場面(一か所小さなアクシデントはあったが)、女性がだまし絵風の夜会服の衣裳で動き回るところなどに驚きがあったが、振付に一貫性があるため、たんなる奇想とは一線を画す、成熟し理路整然とした作品となっていた。クセニア・オヴィシヤニクとジェイムズ・フォーバット、マリサ・フメロとワディム・ムタギロフは、それぞれペアとして極めて完成度が高く魅力的で、印象に残った。

『若者と死』はバレエ史に残る名作のひとつ。ローラン・プティの振付はバッハのハ短調パッサカリアを巧みに活かしたものだが、それ以上にこれを踊る幸運に浴してきた歴代のダンサーたちの名前は綺羅星のごとくである。ニコラ・ル・リッシュは今や若者役の代名詞のよう

な存在で、人物像に生命を吹き込み、難度の高い振付をニュアンス豊かに踊った。死神役のタマラ・ロホはミスキャストで、大きな存在感の示し方が間違っており、あまりにもファム・ファタル的でありすぎた。そのエクステンションは眼の眩むようなもので一見の価値があったが、わずかに過剰気味で、肉体が強調されすぎてしまった。前回この役で強い印象を残したジャ・ジャンは、今回は土曜のマチネで出番を与えられるにとどまった。

さて、の代表的なレパートリーといえば、これまでに上演回数

回を優に重ねてきたハラルド・ランダー振付の『エチュード』を忘れるわけにはいかない。これが「カンパニー全体の力量を露わにする」作品であるのはもちろんだし、バレエ・ミストレスのホワ・ファン・ジャンの尽力でこれほどの水準に仕上がったコール・ド・バレエが満場の喝采に値するものであることにも、疑いの余地はない。センリ・コウはあの短いオープニングでぶれのない技術を示したが、この日の成功は全て、ここから始まったのである。私がひとつだけ苦言を呈すなら、それは、この作品がエピソードの羅列であること——ダンサーが袖から登場しては、短いシークエンスで観客を魅了したかと思うと退場する——だろう。いわゆる“シルフィード”の場面は、一般的には長く残る余韻を残すほどのものではないが、この日の高橋絵里奈はバレリーナとして完成されており、その優雅な技術と完璧なトゥール・アン・レールは、私の尽きることのない感嘆を誘うものだった。高橋の相手役のワディム・ムタギロフが、公演の日程半ばで降板を余儀なくされたのは残念というほかないが、その代役に立ったアルバン・レンドルフは、振付家ハラルド・ランダーがデンマークのバレエ風土の申し子であることを改めて思い起こさせるすぐれた踊りだった。ENBのオーケストラも作品タイトルの由来にもなったチェルニーの練習曲(リスエアのオーケストラ編曲による)を熱演し、フィナーレを期待通りの熱狂的な祝祭へと盛り上げた。

完璧なミックス・ビルというのはなかなかお目にかかれないものだが、今回のロボのプログラム構成はその稀な例だといえる。このバレエ団は現在、すべての階級に才能あるダンサーがひしめき、たいへんよい状態にある(私個人は、男性の見せ場を女性同様に増やしたよりバランスのとれたレパートリーを見たいと感じてはいるが)。昇進が少ないという意味では動きに乏しいともいえるが、新作と再演作品の双方でもっと多くのダンサーが力を存分に発揮し、団全体が新たな世代へと移行してゆけばと願っている。(訳:長野由紀)